

バスが停まる。

中から、一人の男が降りてくる。

男は左手にトランクを持ち、右手をポケットに突っ込んでいる。

男の名前は、トオル。

トオルは周囲を見回し、近くにあったベンチに座る。

トオルは左手でトランクを開き、中から地図を取り出す。

トオルは地図をめくり、周囲の景色と見比べる。

そこへ、8人の人々がやってくる。

カズエ

私が彼に初めて会ったのは、今からちょうど半年前。秋が過ぎて、風が少しづつ冷たくなり始めた頃だった。

ノリオ

彼はトランク一つで、ふらりとやってきた。まるで旅の途中とでもいったような感じで。

ノダ

実際、彼はいつも旅をしていた。一つの場所にいられるのは、長くて1年。それ以上は、彼がどんなに望んでも、無理だった。

トモエダ

なぜ彼は旅をするのか。その理由を知っているのは、彼の家族だけだった。半年後、私はその理由を知ることになる。彼が隠していた力を、この目で

イナバ

見ることになる。

8人
ヒサシ
エイコ
ワタル
ヒサシ
エイコ
ワタル
カズエ
ワタル
ノリオ
ワタル
エイコ
ヒサシ
イナバ
トモエダ
ノダ

そもその始まりは、今からちようど二五年前。彼が二〇歳の時だった。彼の父は医師だった。東京の郊外で、小さな医院を開いていた。

彼には6歳上の姉と。4歳上の兄がいた。

彼は幼い頃から父の背中を見て育った。夜中に電話で叩き起こされ、慌てて往診に出かけていく父。赤ちゃんが泣き出さないように、百面相をしながら注射を打つ父。小学生が犬を連れてくると、「ウチは獣医じゃないのになあ」と思いながらも、笑顔で診察してあげる父。

だから、彼にとつてはきわめて自然なことだった。父の跡を継いで、医師になるということは。

それは4歳上の兄も同じだった。

兄は「父さんの跡は僕が継ぐ」と公言して憚らなかつた。実際、彼は小学校でも中学校でもトップの成績で、担任の教師から「医者でも弁護士でも好きなものになれます」と太鼓判を押されていた。

その兄に比べると、彼の成績はガタガタだった。

兄は「おまえには無理だ」と言った。

姉は「世の中にはいろんな職業があるのよ。今から医者って決めなくてもいいんじゃない？」と言った。

父は何も言わなかつた。が、その顔には、「早く諦めてくれないかな」とゴシツク体で書いてあつた。

それでも、彼は医師になりたかつた。

医師になつて、困っている人を助けたかつた。

そして、助けた人たちに「ありがとう」と言われたかつた。

8人
ヒサシ

エイコ
ワタル
ノリオ
カズエ

ノダ
トモエダ
イナバ
ノダ
トモエダ
イナバ
8人

ワタル

彼が10歳の時、父が倒れた。

それは、今にも雪が降り出しそうな夜だった。父はいつものように電話で叩き起こされ、往診に出かけていった。2時間ほどして帰ってくると、外は肌を突き刺すような寒さなのに、顔中汗びっしりだった。玄関に迎えに出た母が「大丈夫？」と聞くと、何も答えずにその場にうずくまった。姉はすぐに救急車を呼んだ。

兄は父を寝室へ運んだ。
10歳の彼だけは、何をしてもいいかわからずに、オロオロしていた。が、ベットに横になった父の顔を見ると、喉元に熱い固まりがこみ上げてきた。

しかし、彼は泣かなかった。

必死で涙をこらえて、父の額に右手を当てた。

そして、「父さん」と呼びかけた。

父さん。

父さん。

父さん。

すると、突然、彼の右手は燃え上がった。いや、そう思ったのは彼だけで、横にいた母も兄も姉も、炎なんか見なかったと言う。が、彼には燃え上がったとしか思えなかった。それほど右手の掌が熱く感じられたのだ。彼は驚いて、父の額から右手を放した。すると、父がゆっくりと目を開いた。そして、何事もなかったかのように、「どうしたおまえたち、そんな顔を
して」と言った。
それがすべての始まりだった。

エイコ
ヒサシ

その時、彼は力を手に入れた。
そして同時に、彼の旅も始まったのだった。彼は力を失わない限り、旅を
続けなければならぬ。自分が力を持っていることを、誰にも気づかれな
いように。

8人

そして、今からちょうど半年前、彼はこの場所へと辿りついたのだった。

そこへ、マリがやってくる。トオルの横に座る。

トオルが地図をしまい、トランクをつかんで立ち上がる。

と、トランクの蓋が開いて、中身がドツと地面にこぼれ落ちる。

トオルは慌てて中身を拾い始める。

マリもすぐに立ち上がり、目の前に落ちていた靴下を拾う。

マリ
トオル
トオル
トオル
トオル
トオル
トオル
トオル

（靴下を差し出して）はい、これ。
あ、すいません。（と受け取る）

いいえ。

なんか、鍵が壊れてたみたいで。確かに締めたはずなんですけど。

締めてません。

え？

あなたは鍵を締めてません。私、見てました。

（鍵を確かめて）本当だ。壊れてない。悪いのはトランクじゃなくて、僕

だったのか。

はい、これで全部です。（とパンツを差し出す）

（受け取って）すいません、こんな物まで。

マリ
トオル

マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル
マリ トオル

いいんですよ。ちゃんと洗ってあるんでしょ？
えーと……。

洗ってなかったんですか？

いや、一週間前に洗いました。それからまだ一度もはいてません。でも、さっきの靴下は……。

後で手を洗っておきます。だから、ご心配なく。

すいません。恩を仇で返すような真似をして。

右手、怪我でもなさってるんですか？

え？ ええ、まあ。

じゃ、大変でしょう。こんなに大きなトランクを持って歩くのは。

ええ。でも、僕はこれから家へ帰るところなんです。

お家はこの近くなんですか？

それが、よくわからないんです。

わからないって？

実は僕、この近くのマンションへ引っ越してきたんです。でも、そのマンションを借りてくれたのは兄で、僕は今日初めて来たんです。番地はわかってるんですが、それがどっちの方角なのか。(と地図を開く)

(覗き込んで)この丸印ですか？

そうです。下に書いてあるのが住所です。

じゃ、私が案内しますよ。ここから歩いて5分ぐらいですから。(とトランクを持つ)

でも、どこかへお出かけじゃなかったんですか？

行って帰って10分じゃないですか。次のバスには乗れますよ。

トオル

マリ

トオル

マリ

トオル

マリ

トオル

マリ
トオル

マリ

トオル

マリ

8人

でも。

私、時計を忘れてきたんです。取りに戻ろうかどうしようか迷ってたんだ

けど、やっと決心が付きました。

話がいきなり見えなくなりましたが。

だから、あなたがこれから行く所は、私が住んでる所なんですよ。

ということ、あなたは同じマンションの方だったんですか？

しかも、お隣さんだったんです。私は203号室。

僕は204号室。本当にお隣さんだ。(と姿勢を正して) 今度越してきま

した、ヤノです。よろしくお願いします。

(姿勢を正して) フカマチです。よろしくお願いします。

僕、男のくせに方向音痴なんです。自分が今、どこにいるのかもわかつ

てないんです。あなたに会えなかったら、この辺りを果てしなくさまよう

ことになってたでしょう。

じゃ、行きましようか。

はい。

これが彼との出会いだった。今からちょうど半年前、秋が過ぎて、風が少

しずつ冷たくなり始めた頃だった。

そして、半年後、私は彼が隠していた力を、この目で見ることになる。

トオルがポケットから右手を出す。その手には手袋をしている。
トオルが右手を前に伸ばす。他の9人も右手を前に伸ばす。

ノリオがベンチに座って、本を見ている。
トオルがその横に立って、同じ本を読み始める。

トオル

「My father cleaned the plates, and then we went up the front steps to the garage and got our wheels. My father's is a two-year-old Raleigh, and mine is the bike he bought me in San Francisco before I was four. It is one of the smallest two-wheelers made, and the fork's buckled. My mother wanted to give it to the Salvation Army, but my father said, "I want that bike." And he took it and put it in his garage. Now he went to that little red bike and he said, "You can ride the big one if you want to, while I clean this little one."」よー、ママまぶの意味はわかったかな、ノリオくん？

まあ、だいたい。

じゃ、訳してみようか。

はい、どうぞ。

どうぞじゃなくて、君が訳すんだよ。
いや、僕はいいですよ。トオルさんから先に訳してください。

ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ

トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
トオル

僕は君に訳してほしいんだ。
トオルさんを差し置いて先に訳すなんて、そんな生意気なことできません。
これは授業なんだよ。先生が訳せて言ったら、素直に訳すんだ。
いきなりそんなこと言われても。じゃ、次の授業までの宿題ってことで、
手を打ちませんか？
君は僕と取引をしようっていうのか？
取引だなんてとんでもない。僕はいわゆる一つの提案をしてるんです。
ノリオくん、いい機会だから、君に忠告をさせてもらおうよ。君は今年の受験にすべて失敗した。お母さんとお姉さんは、「あんたの頭で大学は無理よ。さっさと就職しちやいなさい」と言った。
全く無礼なヤツらです。あいつらには、僕の中に眠ってる未知の可能性が、全然わかってない。
お母さんとお姉さんを見返すためにも、来年の受験ではぜひとも合格したいよね？
もちろんですよ。片っ端から合格して、吠え面かかせてやります。
はつきり言おう。今の状態が続いたら、吠え面をかくのは君だと思う。
僕が吠え面を？
そう。その面だ。
でも、僕は毎日しっかり勉強してますよ。昼間は予備校へ行って、夜はトオルさんの所へ来て。
君がここへ来るようになってから、もう1カ月経つ。が、君の力は全くと言っていいほど伸びてない。冷静に見て、大学受験どころか、高校受験も難しいと思う。

ノリオ
トオル

なぜだ。僕は毎日勉強してるのに。

勉強っていうのは、ただ授業を受けてればいいってものじゃない。自分から学ぼうっていう積極的な姿勢が大切なんだ。さあ、僕が読んだ所をもう一度読んでごらん。そして、自分の力で訳してごらん。

ノリオ
トオル
ノリオ

わかりました。やってみます。「My father cleaned the plates,」よし、そこまでの意味は？
マイフアザーはプレイツをクリーンした。

そこへ、マリがやってくる。

マリ

トオルさん、ちよつと邪魔してもいい？

トオル

ごめん。今、授業中なんだ。

ノリオ

5分休憩ってことにしましょう。ちよつど区切りのいい所だし。

トオル

どこが？

マリ

例のチラシを描いてみたのよ。よかったら見てくれない？

ノリオ

チラシって？

マリ

宣伝用のチラシよ。矢野英会話教室の。(とチラシを差し出す)

トオル

(受け取って)へえ、マリちゃんて、絵がうまいんだね。このタヌキ、何も見ないで、描いたの？

マリ

まあね。私、高校時代は美術選択だったのよ。でも、それはタヌキじゃない

トオル

よく見てよ。「ニャア」って鳴いてるでしょう？

マリ

これがネコ？

トオル

よく見てよ。「ニャア」って鳴いてるでしょう？

トオル

マリ

マリ

マリ

ノリオ

マリ

ノリオ

マリ

ノリオ

トオル

マリ

トオル

マリ

ノリオ

「僕も話せるようになりたいニヤア」か。絵もうまいけど、この「ニヤア」も最高だね。

でしようでしよう？

でも、こんなのを見て、来る人がいるかな。

いるわよ。最近のテレビって、英会話学校のコマーションが多いと思わな

い？ あれだけコマーションをやってるってことは、かなり儲かってるっ

てことよ。つまり、英会話を習いたがってる人は、ますます増えてきてる

ってわけ。

でも、テレビでやってるような所は、みんな外人の先生なんだろう？

トオルさんだって、外人みたいなものじゃない。

この顔のどこが外人なんだよ。

顔は日本人でも、心は外人なの。トオルさんは、中学高校と6年もアメリ

カへ行つたのよ。

そのわりに、発音はイマイチだね。

君に言われたくはないな。

とにかく、この近所になって、英会話を習いたがってる人はいっぱいいる

の。その人たちが、トオルさんのことを知ったら、きつとワーって押しか

けてくるわよ。今、私たちがやらなければいけないことは、一にも二にも

宣伝なの。

僕としては、一人でもいいから新しい生徒に来てほしいな。

あんたも早くクラスメイトがほしいでしょう？

ほしいほしい。ミポリンみたいな子が来てくれたら、きつとやる気が出る

と思う。

マリ
ノリオ

じゃ、あんたを宣伝部長に任命するわ。
宣伝部長？ 俺、部長とか委員長とか一度もやったことないけど、大丈夫かな？

マリ

大丈夫大丈夫。まず最初に、コンビニへ行つて、このチラシを千枚コピーしてきて。次に近所を回つて、郵便受けに1枚ずつ入れてくるの。

マリ
ノリオ

それつて、つまり、チラシ配りをやれてること？
新しい生徒が来るかどうかは、あんたの働きにかかっているのよ。責任重大なのよ、宣伝部長は。

マリ
ノリオ

1枚につき100円とか、アルバイト料は出ませんか？
あんた、よくそんなことが言えるわね。毎日、ただで教えてもらつてるく

マリ

せに、少しは恩返しをしようと思わないの？
でも、一人で千軒も回るなんて、へビーすぎるよマイシスター。

マリ

わかつたわかつた。私も一緒に回るから、五百軒ずつね。

マリ

僕もやるよ。
大丈夫？

マリ
トオル

部長と専務だけに働かせるわけにはいかないからね。
ありがたいございます、社長。

マリ
ノリオ

仲良きことは佳きかな、実篤。
じゃ、休憩はここまでだ。授業の続きをやるうか。

マリ
トオル

そこへ、エイコがやつてくる。

エイコ

ダメじゃない、トオル。玄関の鍵がかかつてなかったわよ。

マリ
エイコ
トオル
エイコ
マリ
マリ
ノリオ
マリ
トオル
エイコ
ノリオ
マリ

あ、こんばんわ。
こんばんわ。(トオルに)ごめんね、お客様だったの？
前に話をしただろう？隣に住んでるマリちゃんとのりおくん。
ああ、あなたたちが。初めまして。トオルの姉のエイコです。
フカマチマリです。トオルさんには、いつもお世話になってます。
弟のノリオです。19歳、独身です。
バカ。
悪いけど、今、授業中なんだ。
そうなの？じゃ、授業参観でもさせてもらおうかな。トオルの授業、前
から一度、見てみたかったんだ。
いや、お姉さんにお見せするような授業じゃありませんよ。
あんたが言うことじゃないでしょう？

そこへ、ワタルがやってくる。

ワタル
エイコ
ワタル
トオル
ワタル
トオル

トオル、おまえってやつは、何回注意すれば、ちゃんと鍵をかけるんだ。
ごめん。鍵をかけなかったのは私。
なんだ、姉さんか。姉さんがそういうことだから、トオルのだからしないの
が治らないんだ。ほら、トオル。(と袋を差し出す)
何だい、それ？
プレゼントだよ。おまえも先生なら、スーツぐらい着ろ。生徒になめられ
るぞ。
ありがとう。どうせ兄さんのお古だろうけど。(と袋を取ろうとする)

ワタル トオル
ワタル エイコ
ワタル エイコ
ワタル エイコ
トオル エイコ
ワタル エイコ
トオル エイコ
ワタル エイコ
トオル エイコ
ワタル エイコ
マリエイコ

（トオルの手をよけて）その前に、俺に何か言うことはないか？
え？ 何だろう。
あれ？ 姉さんからまだ聞いてないのか？
ごめん、まだ言っていなかった。
そうか。実はな、トオル。
ワタルったら、結婚するんだって。結婚式は今年の秋。
本当？
俺が嘘なんかつくもんか。相手は俺の4つ下で。
デパートにお勤めの人。そのスーツも、彼女の売り場で買ってきたのよ。
ワタルったら、1年も前からその売り場に通い続けてたんだって。
聞いてないよ、そんな話。
いや、俺も照れくさくてな。
こう見えても、意外と小心者なのよ。デートに誘い出すのに、半年もかか
ったんだって。その間に、スーツを6着も買ったのよ。まあ、6着でお嫁
さんが手に入れば、安いもんよね。
うるさいな。俺にも少しは話をさせてくれよ。
おめでとう、兄さん。
ありがとう、トオル。（トオルに袋を渡して）後は、おまえだけになっ
たな。まあ、おまえはまだずっと先の話だろうけど。
そうでもないみたいよ。
そうでもないって？
こちら、お隣のフカマチマリさん。
初めまして。

ワタル

へえ、あなたがマリさんですか。トオルのヤツがいろいろお世話になってるそうですね。

マリ

いいえ。私の方こそ、弟がお世話になっちゃって。

ワタル

ということは、君があノノリオくんか。

ワタル

あノ？

ワタル

大学を受けようっていうのに、中学の教科書も読めないそうだな。トオルのやつが言ってたぞ。「毎日が戦いだ」って。

ワタル

失礼ですけど、お兄さんはどちらの大学をご卒業なさったんですか？

ワタル

慶応の医学部だ。今は親父の跡を継いで、開業医をやっている。

エイコ

参りました。

エイコ

ねえ、トオル。ワタルの結婚祝いに、みんなで食事に行かない？

マリ

でも、まだ授業の途中なんだ。

マリ

今日は休戦でことにすればいいだろう。この近くに、うまい天麩羅屋があるんだ。この部屋を探してる時に見つけてな。いつか、おまえを連れてつてやろうと思ってたんだ。

マリ

喜んでお伴します。

マリ

と言いたいところなんですけど、そろそろ母が帰ってきますから。置き手紙をしていけばいいじゃない。さあ、急いで上着を取ってきて。

マリ

じゃ、お言葉に甘えて。行くよ、姉ちゃん。(と走り出す)

マリとノリオが去る。

（エイコに）失礼します。

エイコ
ワタル
トオル
エイコ
ワタル

なかなか感じのいい子じゃない。

弟は少し問題だけだね。

とっつてもいい子だよ。映画が大好きで、俺なんかよりずっと詳しいんだ。

よかったわね、いい人たちに出会えて。

じゃ、出かける前にやっておくか。いつもの診察。

マリがやってくる。

マリ

その時、私は知らなかった。トオルさんのお兄さんとお姉さんが、なぜここへ来たのか。二人は前にも何度かここへ来ていた。私やノリオのいない時に。そのことは、トオルさんから聞いていたけど、別に変だとは思わなかった。「ずいぶん仲のいい兄弟だな」って、感心したぐらいだ。が、一人はけっして遊びに来ていたわけではなかった。トオルさんがこのままここにいても大丈夫かどうか。それを確かめに来ていたのだ。二人はトオルさんの前の家にも来た。今からちょうど半年前。

トオルがベンチに座り、ポケットから右手を出す。
右手の手袋を左手で外す。
ワタルがトオルの横に座り、トオルの右手を持つ。
指や掌をゆっくりと押す。

3

ワタル 先週、姉さんがここへ来た時、熱を出してたんだって？
トオル 風邪を引いてたんだ。でも、薬を飲んだら、すぐに治った。
ワタル 本当か？
トオル 本当だよ。風呂の中で本を読んだら、いつの間にか眠っちゃって。目が
覚めたら、水風呂になってたんだ。
ワタル トオル、私たちはあなたのことを心配して来てるのよ。
エイコ 俺たちに嘘をついても、何の得にもならないぞ。手遅れになって困るのは、
ワタル おまえなんだからな。
トオル (立ち上がった) どうして信じてくれないんだ。俺は本当に風邪を引いた
だけなんだ。
ワタル だったら、なぜ俺たちの目を見ない。
エイコ お願ひ、トオル。本当のことを言って。あなたが熱を出したのは、風邪の
せいじゃないんでしょう？

トオル
ワタル
エイコ
トオル
ワタル
エイコ
トオル
ワタル
エイコ
トオル
ワタル
エイコ
トオル
ワタル
エイコ
トオル
ワタル
エイコ
トオル
ワタル
エイコ

だから、何度も言ってるじゃないか。俺は力なんか使ってないんだ。一回しか。
今、なんて言った？ 一回使ったって言ったのか？
本当に一回だけ？
ああ。
いつ。相手は誰だ。
一週間前。姉さんが来た日の、前の日だよ。交差点で信号待ちしてたら、目の前にいたおばあちゃんがいきなりしやがみこんだんだ。
それで？
すごく苦しそうな顔をしてたから、手遅れになる前にと行って。
そんなことが、なぜおまえにわかる。すぐに病院へ連れていけば、何とかなったかもしれないだろう。
でも、何とかならなかったら？
それで、おばあちゃんは元気になったの？
ああ。自分の足で歩いて帰ったよ。
じゃ、おばあちゃんとは、そこで別れたのね？ その後、会ったりはしてないのね？
会ってないよ。一回しか。
今、なんて言った？ 一回会ったって言ったのか？
今度はどこで会ったのよ。
ここだよ。
ここって、この部屋か？ そのばあさんは、なぜおまえがここに住んでるって知ってるんだ。

トオル

ワタル

トオル

エイコ

トオル

エイコ

トオル

ワタル

トオル

ワタル
トオル

ワタル
トオル

ワタル

トオル

ワタル

俺が住所を教えたからだよ。

なぜ住所を教えたんだ。

おばあちゃんが「教えてくれ」って言ったからだよ。「後でお礼に行きた
いから」って。

じゃ、おばあちゃんは一人で来たのね？

一人って言うより、一人半で感じかな。

何よ、「半」て。

小学生の孫を連れてきたんだよ。

まさかとは思うが、その孫の病気も治したって言うんじゃないだろうな？

仕方なかったんだよ。その子は交通事故で足を折って、膝が真っ直ぐに伸

ばせなくなつたんだ。それを恥ずかしがって、学校へ行ききたがらないって

言うから。

手術をすれば、治るかもしれないだろう。

そのかわり、入院しなくちゃいけないだろう？ 学校を休まなくちゃいけ

ないだろう？

それは、おまえには関係ないことだ。

関係あるよ。その子は俺の目の前にやってきたんだから。俺に「治してく

れ」って言うてきたんだから。

おまえは、そう言うてきたやつをすべて治すつもりなのか？ そんなこと

をして、自分はどうなつてもいいのか？

おばあちゃんには、「もう誰も連れてこないでくれ」って頼んだ。だから、

もう大丈夫だよ。

大丈夫なもんか。おまえが力を使って、無事に済んだことが一度でもある

エイコ
ワタル

か？ そのうち、大勢の患者がドツと押しかけてくる。それを一人ずつ治している、今度はマスコミだ。そうなったら、もうおしまいなんだぞ。俺の言ってる意味がわかるか？ おまえの命がおしまいだと言ってるんだ。もういいわ。すぐにここを出しましょう。

そうだな。そうした方がいい。とりあえず、おまえはいつものホテルへ行け。姉さん、急いで部屋を予約してくれないか。

チャイムの音。
エイコがうなずいて、走り去る。

トオル
ワタル
トオル
ワタル

3人目かな？
ばあさんは、もう誰も連れてこないって約束したんだろう？
約束はしてないよ。俺がそう頼んだだけで。
どうしてきつく言ってやらなかったんだ。これが最後だって。

エイコが戻ってくる。

エイコ
ワタル
トオル
ワタル

お客さんよ。25歳ぐらいの男の人。
知ってるか？
(首を横に振る)
留守だって言って、追い返してくれ。

エイコがうなずいて、走り去る。

ワタル

おまえは奥へ行って、荷物をまとめてこい。着替えは一週間分でいい。その間に、俺が次の家を探して、引っ越しも済ませておく。

トオル

兄さん、ごめんよ。

ワタル

謝って済む問題か。おまえが日本へ帰ってきてから、これで6度目の引っ越しなんだぞ。

トオル

ごめんよ。

ワタル

もういい。おまえは俺の弟だ。どんなにグズでも、たった一人の弟なんだ。

反対側へ、トオルが去る。
と、ノダとエイコがやってくる。

エイコ

ちよつと待ってください。

ノダ

すいません、いきなりお邪魔して。弟さんがお帰りになるまで、ここで待

ワタル

たせてもらえませんか。

ノダ

それは困ります。私たちはすぐにここを出なければならぬ。

ワタル

あなたは何？

ノダ

ヤノトオルの兄です。

初めまして。毎年新聞のノダです。(と名刺を差し出して)実は、僕の知り合いのおばあちゃんから、ヤノさんの話を聞きましてね。ぜひ一度お会いしたくて、こうして訪ねてきたというわけです。

ワタル

取材ですか？

ノダ

いいえ。これはあくまでも、プライベートな訪問です。おばあちゃんの言

エイコ
ノダ
エイコ
ノダ

ワタル
ノダ
ワタル
ワタル

ノダ
ワタル
ノダ
エイコ
ノダ
エイコ
ワタル

ったことが本当なら、僕にも力を貸していただきたいと思ひまして。

力って、何のことですか？
ですから、おばあちゃんとお孫さんを治した、不思議な力ですよ。

治したって、どういうことですか？

あれ？ お二人はご存じじゃないんですか？ おばあちゃんの話によると、

あなた方の弟さんは、病氣や怪我を触っただけで治すことができます。

いわゆるヒーリング能力ってやつですね。

バカバカしい。そんな力がトオルにあるもんですか。

しかし、現に、お孫さんの足は治ったんですよ。

それは何かの間違いでしょう。だいたいヒーリング能力なんてものは、医

学的には何の根拠もない。大抵の場合は、暗示によつて治った気にさせる

だけのこと。新聞社の方がまじめな顔をして話すような問題じゃない。

ずいぶん、お詳しいんですね。

私は医師です。そういった迷信を信じる人には、何度も会いました。

僕も昨日までは迷信だと思つてたんです。しかし、あのお孫さんの足は前

に何度も見てましたから。

とにかく、今日はこれでお引き取り願えませんか。私たちはもう帰らなく

ちやいけないんで。

じゃ、明日、もう一度来ます。

来ても無駄ですよ。僕には弟さんの力が必要なんです。僕の話を聞

けば、弟さんもきっとわかってくれると思ひます。

わかつて何もできませんよ。

ノダ
エイコ
ワタル
エイコ

記者っていうのは、実際に自分の目で見ないと信じられないですよ。実際に弟さんに会うまでは、絶対に諦めませんよ。帰ってください。姉さん。早くここから出ていってください。

カズエがやってくる。
ベンチに座って、バッグの中からノートを取り出す。
そこへ、ノリオがやってくる。

ノリオ　あれ？　ママ、帰ってたんだ。
カズエ　またすぐに出かけるわよ。それより、あんた、予備校は？
ノリオ　今日は休みなんだ。
カズエ　休みって、予備校全体が？
ノリオ　いや、俺一人が。
カズエ　ということは、授業をサボったのね？
ノリオ　いいかい、ママ。勉強っていうのは、ただ授業を受けてればいいもの
カズエ　じゃない。自分から学ぼうっていう積極的な姿勢が大切なんだ。
カズエ　積極的な姿勢ね。そんな立派なものが、あんたにあるの？
ノリオ　まさか。あつたら、今頃、浪人なんかしてないよ。
カズエ　それがわかっているなら、まじめに授業に出なさいよ。
ノリオ　今日は仕方なかったんだ。宣伝部長としての仕事があつたから。
カズエ　宣伝部長？
ノリオ　近所を回って、このチラシを配ってきたんだ。（と差し出す）

カズエ
ノリオ

(覗き込んで)全部で何軒回ってきたの？
333軒。姉ちゃんが「ゆっくり配れ」って言うから、半日もかかっちゃった。

カズエ
ノリオ

つまり、あんたはトオルくんのお手伝いしてたのね？
そういうこと。トオルさんはこの半年間、一円も収入がないんだ。放っておいたら、餓死しちゃうよ。

カズエ
ノリオ

でも、今のところはピンピンしてるわね。あの人、どうやって生計を立ててるのかしら。誰かさんみたいに、親のスネでもかじってるのかな。
それって、ミーのことですか？

そこへ、トオルとマリがやってくる。

マリ
カズエ

ただいま。あれ？ ママがいる。
いたらいけない？ 仕事の途中で、ちよつと寄ったのよ。

マリ

ママって、本当に働くのが好きね。化粧品セールスって、そんなにおもしろい？

カズエ

おもしろいわよ。ママのお得意さんの中には、テレビの役者さんもいるんだけどさ、セールスしてる時はママの方が役者よ。心の中では「こんなの高すぎるわ」って思っても、顔には絶対に出さないの。にっこり笑って、「お使いになつてみれば、むしろ安いと感ずるはずですよ。これでイチコロよ。時々、自分のこと、名女優だつて思うわ。」

ノリオ
カズエ

俺はただの嘘つきだと思うな。
誰のおかげで、ここまで大きくなれたと思ってるの？

トオル
カズエ
トオル
カズエ
トオル
ノリオ
トオル
ノリオ
トオル
カズエ
カズエ
マリ
カズエ
マリ
ノリオ
マリ

じゃ、僕は失礼します。
ちよつと待って。昨夜はどうもありがとう。この子たちに、食事をご馳走
してくれましたでしょうか？
いや、ご馳走したのは兄です。僕がいつもお世話になってるからって。
お世話になってるのは、こっちの方じゃない。ノリオがただで英語を教え
てもらって。
その分は、マリちゃんに夕食を食べさせてもらってますから。
気にすることないよ。あれは、ただの実験なんだから。
実験て？
自分の料理をトオルさんに食べさせて、うまくできたかどうか調べてるん
だ。将来、レストランを開く時のために。
(マリに) ということは、僕はモルモットだったの？
ごめんね、今まで黙ってて。トオルさんが引越してくるまでは、ノリオ
がモルモットだったのよ。でも、この子ったら、何を作っても、ガツガツ
食べるだけだから。
貯金の方はたまってるの？
まだまだ。頭金ができるまで、あと二〇年はかかるだろうな。
ウエイトレスなんかやってるからよ。マリもママみたいに、セールスをや
れば？
私はママみたいに演技力がないから。でも、ノリオが手伝ってくれたら、
あと5年で済むのよね。
俺はダメだよ。映画監督になるって決めてるんだから。
あんたは、ディレクターより、ウエイターの方が向いてるの。

ノリオ

わかってないな。俺には遠大な計画があるんだよ。俺が今、英語を勉強してるのは、何のためだと思う？ 大学を卒業したら、ハリウッドへ行くためさ。

トオル

僕は通訳を連れていった方がいいと思うな。

ノリオ

じゃ、トオルさんが来てくださいよ。

マリ

ダメダメ。トオルさんには、英会話教室があるんだから。

ノリオ

俺がハリウッドへ行く頃には、もう潰れてるよ。

マリ

あんたって子はなんてこと言うのよ。そうならないために、今、チラシを配ってきたんでしよう？

ノリオ

でも、こんなのを見て、来る人がいるかな。(とチラシを差し出す)

マリ

(奪い取って) どうしてチラシを持つてるのよ。まさか、全部配らなかつたんじゃないでしょうね？

チャイムの音。

カズエ

あら、お客さんみたい。

マリ

私、見てくる。

マリが走り去る。

カズエ

生徒が一人も来なかったら、どうするつもり？

トオル

もう少しがんばってみて、それでもダメだったら、他の仕事を探します。

カズエ

それまで、どうやって生活するのよ。

トオル 何とかあります。今のところは、兄や姉が援助してくれてるんで。

マリがトモエダの手を引っ張って戻ってくる。

マリ トオルさん、大変！ 新しい生徒さんよ！

トオル え？

ここは私に任せて。(トモエダに) ようこそお越しくださいました。まあ、こちらへおかけください。ノリオ、コーヒーをお持ちして。

ノリオ オーケイ。(と走り出す)

マリ バカ、家の中で走るんじゃないの！

ノリオが走り去る。

トモエダ 私はヤノトオルさんに会いに来たんです。そうしたら、ドアに、「隣にい

ます」って札が貼ってあったから。

カズエ はいはい、ヤノトオルなら、ここにいますよ。トオルくん、ご挨拶して。

トオル ヤノです。初めまして。

トモエダ 初めまして、トモエダです。

カズエ へえ、あなた、トモエダさんて仰るの。失礼ですけど、お年は？

トモエダ 22です。

カズエ あら、まだお若いのね。道理で、お肌がスベスベだわ。でも、油断してる

と、すぐに荒れてくるのよ。

マリ ママ、今はセールスじゃないのよ。

カズエ
トモエダ
カズエ

トモエダ

カズエ

トモエダ

カズエ

トオル

トモエダ

トモエル

トモエダ

マリ

トモエダ

カズエ

トモエダ

カズエ

トモエダ

わかっているわよ。ところで、トモエダさん、ご職業は？
カメラマンです。まだ見習いですけど。

まあ、素敵。カメラマンで言ったら、世界中を飛び回って、いろんな景色を撮るんでしょう？ そうしたら、やっぱり英語が必要になるわよね？

ええ、まあ。だって、すぐに英会話を始めなくちゃ。あなたがここへ来たのは正解よ。

あの、私はヤノさんと話したいんですけど。

わかってますわかってます。さあ、トオルくん。この方に、カリキュラムをご説明して。

(トモエダに) えーとですね、僕の授業は、基本的にテキストを使いません。英会話っていうのは、やっぱり耳と口で覚えるものですから。

ちよつと待ってください。授業って、何のことですか？

だから、英会話の授業ですよ。
どうして私が英会話なんか習わなくちゃいけないんですか？
あなた、このチラシを見て来たんじゃないの？ (と差し出す)

(受け取って) 何ですか、このタヌキ。
(奪い取って) タヌキじゃなくて、ネコよ。

トモエダさん、でしたわね？ あなたがここへいらっしやったのは、英会話を習うためじゃないって仰るのね？

私、英会話なんて、興味ありません。
本当に興味ない？ カメラマンをやっていく上で、英会話ができ方がいい

それはそうかもしれないけど。

カズエ
トモエダ

今、この教室に入れば、最初の1カ月はタダで授業が受けられるのよ。本当ですか？

カズエ

そうよね、トオルくん？

トオル

いや、それはちよつと――

カズエ

さらに、授業の時間は、あなたが自由に選べるの。24時間、いつでもオーケーよ。

トモエダ

それなら、仕事が終わってからでも来られる。

カズエ

決断するなら今よ。このチャンスを逃したら、あなたが英会話を習う日は

トモエダ

二度と来ないかもしれない。いや、きつと来ないでしょう。

カズエ

わかりました。私、やります。

トオル

じゃ、詳しい話は向こうの教室で。さあ、トオルくん。こちらへどうぞ。

トオルとトモエダが去る。

マリ

さすがね、ママ。でも、1カ月タダっていうのは、サービスしすぎじゃない？

カズエ

一人目は赤字でいいのよ。人数が増えてきたら、少しずつ儲けを増やしていくの。

マリ

なるほどね。

そこへ、ノリオがスーツに着替えて戻ってくる。
手には、コーヒーカーップを載せたトレイを持っている。

ノリオ
カズエ
ノリオ

あれ？ 俺のクラスメイトは？
帰ったわよ。
この服は何のため……。

マリが立ち上がる。

マリ

すべてがうまくいきそうだった。明日になったら、また新しい生徒が来るだろう。一カ月も経ったら、教室の中は生徒でいっぱいになるだろう。私の未来の設計図は、ほとんど完成しようとしていた。小さいけど、自分のお店が持てた私。監督は無理だったけど、なんとか映画の仕事につくことができたノリオ。名女優にますます磨きがかかったママ。そして、みんなが家へ帰ると、トオルさんが笑顔で迎えてくれる。私の設計図の真ん中には、四人が笑顔で並んでいた。トオルさんのいない未来なんて、私には考えられなかった。

トオルがやってくる。

トオル トモエダさん、喜んで帰ったよ。

マリ 最初の授業はいつ？

トオル 明日の夜。一カ月でマスターなら、毎日来ますって。

マリ まさか、一カ月でマスターして、やめるつもりじゃないでしょうね？

トオル それは無理だと思うよ。あの人のレベル、ノリオくとあんまり変わらな

いみたいだったから。

マリ よかった。で、授業はどんなふうにするの？

トオル 最初は世間話だよ。もちろん、英語で話すんだけどね。あと、毎回15分だ

け、この本を読もうと思うんだ。(と本を差し出す)

マリ ノリオが今、読んでる本ね？

トオル ウイリアム・サローヤンの『PAPA YOU'RE CRAZY』。

マリ それ、どんな話なの？

トオル 小説家のお父さんと10歳の息子が、海辺の家で暮らす話だよ。

マリ それだけ聞くと、凄くつまらなそう。

トオル ストーリーで読ませる話じゃないからね。僕はこのお父さんが大好きなん

だ。なんだか、死んだ親父みたいで。

マリ

そう。トオルさんのパパって、どんな人だったの？

トオル

普通の町医者だよ。さてと、明日の授業の準備でもしようかな。

マリ

じゃ、私は洗濯でもしようかな。ついでだから、トオルさんのも洗っちゃ

トオル

うね。

マリ

いいよ。

トオル

あら、遠慮しないでよ。どうせついでなんだから。

トオル

でも、今日はチラシ配りを手伝ってもらったし、食事だって毎日食べさせ

マリ

てもらってるし。

トオル

そんなのお互い様じゃない。

マリ

でも、これ以上は甘えられないよ。

トオル

私は、私のやりたいことをやってるだけ。迷惑じゃなかったら、やらせて

トオル

よ。

トオル

迷惑なもんか。マリちゃんのおかげで、どれだけ助かってることか。でも、

マリ

どこかで線を引かなくちゃいけないと思うんだ。

トオル

線を？

マリ

ああ。

トオル

悪いけど、私、そういうことは全然気にしないタイプなの。だから、勝手に

トオル

にやらせてもらう。洗濯物はお風呂場だよね？

トオル

ちよつとマリちゃん！

マリが走り去る。

反対側から、ヒサシがやってくる。

ヒサシ トオル ヒサシ
トオル トオル ヒサシ
トオル トオル ヒサシ
トオル トオル ヒサシ
トオル トオル ヒサシ
トオル トオル ヒサシ
トオル トオル ヒサシ
トオル トオル ヒサシ
トオル トオル ヒサシ
トオル トオル ヒサシ

どうする、トオル。

どうするって？

あの子、おまえが好きみたいだぞ。しかも、「トオルさんとだったら結婚してもいい」っていうぐらい好きみたいだぞ。どうするどうする。

どうも思っていないよ。俺は別にマリちゃんのことば——

何とも思っていないのか？

なかなかいい子だとは思ってるよ。明るいし、何をするにも一生懸命だし。

ふーん。

何だよ、その目は。

一人じゃないって素敵なことだな、トオル。

うるさいな。父さん、今日は何しに来たんだよ。用がないなら、さっさと

帰れよ。

親に向かつて、「帰れ」とはなんだ。久しぶりに来てやったのに。

俺は「来てくれ」なんて言っていない。父さんが勝手に来たんだろう？

強がり言っちゃって。心の底では、「父さんに来てほしい。早く来て」っ

て思ってたくせに。

父さんに帰ってほしい、早く帰って。

いやだね。

全く勝手なんだから。いいよ。いたいだけ、いればいい。俺は明日の授業

の準備をするから。

その前に、俺に何か相談したいことがあるんじゃないのか？

別に。

正直に言えよ。あの子に話すべきか、話さざるべきか、決心がつかないん

トオル
ヒサシ
トオル
ヒサシ
トオル
ヒサシ
トオル
ヒサシ
トオル
ヒサシ
トオル
ヒサシ

だろ？
決心なら、ついてるよ。
ほう。じゃ、話すつもりか？
話さない。そんなことをしたって、彼女に迷惑がかかるだけだ。
そうとは限らないだろう。あの子は、芯のしっかりした子だ。最初は動揺するかもしれないが、おまえに対する気持ちはきつと変わらない。
でも、俺には彼女を幸せにする自信がない。
それがそれほど難しいことかな。確かに、おまえには特殊な力がある。が、実際に使わなければ、の話さ。普通の人間と変わらないだろう。
使わなければ、の話さ。それができないから苦労してるんだ。
俺は最初に言ったはずだぞ。おまえが「〇歳の時、俺が脳血栓で倒れた時だ。
「今度、俺が倒れても、あの力はけっして使うな」って。
そう言われて、俺は悩んだんだ。「せっかく助けてあげたのに、どうして怒られなくちゃいけないんだ」って。でも、「二度と使いません」て約束するしかなかった。
しかし、おまえは約束を破った。
あれは仕方なかったんだ。同級生の飼ってた犬が、俺の目の前で車にはねられたから。
おかげで、おまえは日本にいられなくなった。
でも、アメリカにいる間は、一度も使わなかった。姉さんが見張ってるから、使いたくても使えなかったんだだけだ。
ところが、俺が死んだらどうだ。約束なんかすっかり忘れて、使いたい放題。まるで、俺が死ぬのを待っていたかのように。

トオ
ル
ヒサ
シ

俺はあの時、決めたんだ。
決めたって、何を。

トオ
ル
ヒサ
シ

父さんが危篤だつて連絡をもらつて、俺は慌てて日本へ帰つてきた。でも、俺は間に合わなかつた。あの時の俺と同じ気持ちで、毎日、いろんな人が感じてる。それがどんなに辛いことか、俺にはよくわかる。俺には、その人たちを助けることができる。だったら、もう我慢するのはよそう。俺が死ぬまで、俺にできるだけのことをしようって。
立派だな。しかし、俺とした約束はどうなる。
父さんならわかるだろう、俺の気持ちか。
病人や怪我人を見ると、つい治したくなる気持ちか。
そうじゃない。「治してくれ」って言われたら、治してあげたくなる気持ちか。

トオ
ル
ヒサ
シ
トオ
ル
ヒサ
シ
トオ
ル
ヒサ
シ
トオ
ル
ヒサ
シ

俺は医者だ。患者を治すのが仕事なんだ。しかし、おまえはただの英会話教師だろう。
でも、俺には力がある。医者には治せない患者だつて、治すことができる。そのかわり、おまえはすべてを失う。
それは仕方ないことなんだ。
本当に仕方ないことか。おまえは本当にそれでいいのか。
ああ。
今まではそれでよかつたかもしれない。が、今のおまえにはあの子がいる。おまえが突然、姿を消したら、あの子はきつと傷つくだろう。その傷を、おまえはどうやって治すつもりだ。
でも、父さん。

そこへ、マリがやってくる。
洗濯物が入ったカゴを抱えている。

マリ トオルさん、誰と話してるの？

トオル 別に。ただの独り言さ。

マリ でも、今、「父さん」って。

トオル この本を読んだんだ。『PAPA YOU'RE CRAZY』。

マリ ああ。10歳の男の子と、お父さんの話ね？

トオル (本を開いて) このお父さんが、死んだ親父によく似てるんだ。「This is

the thing I want you to remember," he said. "Nothing in your life has ever got to be one way, and no other. You can stay with me until you want to go home. You can come back whenever you want to. It never has to be one way and no other way."」

ヒサシ 「It never has to be one way and no other way.」……一つの道しかなくて他の道はない、なんていうことは決してないんだ。

トオル 「I know that, Pop.」……わかってるよ、父さん。

トオルが本を読んでいる。
そこへ、カズエがやってくる。

カズエ

トオルくん、ちよつといい？

トオル

はい、何か？

カズエ

実は、ノリオが朝から熱を出しちゃってるのよ。だから、今日の授業は休

トオル

ませてほしいの。

カズエ

風邪ですか？

トオル

たぶんね。

カズエ

わかりました。ノリオくんには、ゆっくり休むように伝えてください。授

カズエ

業の方は、トモエダさんと二人でやるから、心配するなって。

トオル

そうか。今日は、トモエダさんの最初の授業なのね？

カズエ

ええ。ノリオくんも運が悪いですよ。やつとクラスメイトができたって

カズエ

いうのに。

トオル

あんまりはしゃぐから、天罰が下ったのよ。

カズエ

でも、やる気が出てきたのは、いいことじゃないですか。これでまじめに

カズエ

勉強するようになったら、しめたものなんですけど。

トオル

そのところ、トオルくんにぜひとも聞いておきたいことがあるのよ。

トオル

何ですか？

カズエ

ノリオのやつ、映画監督になりたいつて言ってるじゃない？ 私、映画のことはよく知らないんだけど、監督になるにはやっぱり勉強ができないとまずいのかな？

トオル

学校の成績と映画の才能は、全く関係ありませんよ。ちなみに、『男はつらいよ』の山田洋次監督は東大出身です。

カズエ

わかった。バカな期待はしないことにする。

そこへ、トモエダとノダがやってくる。

トモエダ

こんにちわ。

カズエ

あら、トモエダさん。今日から早速授業ですって？

トモエダ

ええ。ちよつと早めに来ちやつたんですけど、いいですか？

トオル

全然構いませんよ。ところで、そちらの方は？

カズエ

わかった。二人目の生徒さんよ。トモエダさんが誘ってきてくれたのよ。

ノダ

違いますよ。僕は毎年新聞のノダです。社会部で記者をやっています。

(と名刺を差し出す)

カズエ

(受け取って) まあ、素敵。記者って言ったら、世界中を飛び回って、いろんな事件を取材してくるんでしょう？ そうしたら、やっぱり英語が必

要になるわよね？

ノダ

ちよつと待ってください。

カズエ

だったら、すぐに英会話を始めなくちゃ。あなたがここへ来たのは正解よ。

ノダ

いいから、待って。(トモエダに) 昨日も、この調子で丸め込まれたのか。

トモエダ

はい。気づいた時には、生徒になってました。

ノダ

確かに、おまえがかなう相手じゃなさそうだ。(カズエに) 失礼ですけど、あなたは？

カズエ

私はフカマチカズエです。化粧品のセールスをやっています。

ノダ

ヤノさんとはどういう関係ですか？

カズエ

今はただのお隣さんですけど、来年あたりは親子になっているでしょう。

ノダ

つまり、今は赤の他人でわけですね？ 申し訳ありませんが、僕はヤノさん

カズエ

に用があつて来たんですよ。

カズエ

わかつてますわかつてます。さあ、トオルくん。この方に、カリキュラム

ノダ

をご説明して。

トオル

だから、僕は英会話を習いに来たんじゃないんです。ヤノさんと話がした

トオル

くて来たんです。

ノダ

話って、何ですか？

トオル

本当は昨日来るつもりだったんですが、突然押しかけたら失礼かと思いま

トオル

してね。それで、こいつに「アポを取ってこい」って言ったんです。とこ

トオル

ろが、こいつはアポを取ってくるかわりに、生徒になつてきた。

トモエダ

それじゃ、あなたが生徒になるって言ったのは嘘だったんですか？

ノダ

嘘じゃありません。私は今でも英会話を習いたい気持ちです。

トオル

いいから、おまえは黙ってる。ヤノさん、実を言うと、僕は半年前にも、

トオル

あなたに会いに来たんです。ところが、あなたのお兄さんとお姉さんに門

トオル

前払いを食わされた。仕方なく、次の日に来てみたら、あなたは引越した後だった。

トオル

そうだったんですか。でも、よくここがわかりましたね。

ノダ

探したんですよ、半年もかけて。あなたとどうしても話がしたくて。

カズエ そんなに、トオルくんは英会話を習いたかったの。
ノダ その話じゃなくて、ヤノさんが持つてる力の話ですよ。
カズエ 力って？

そこへ、マリがやってくる。
洗濯物が入ったカゴを抱えている。

マリ あら、お客様？
トオル マリちゃん、悪いけど、向こうへ行つててくれないか。それから、お母さん

んも。

別にいいけど、力って何のこと？

カズエ その話は、後でしますから。

トオル そうか。この人たちは、力のことを知らないんですね？

カズエ だから、力って何よ。

トオル 何でもありませんよ。さあ、早く向こうへ行つて。

ノダ どうして隠そうとするんですか？ あなたの力が本物なら、隠す必要なん

カズエ かないはずだ。それとも、僕が聞いた話は嘘だったんですか？ 触つただ

ノダ けで病氣や怪我を治すことができるっていうのは。

カズエ 何ですって？

ノダ ヒーリング能力。この力を、ヤノさんは持つてるんです。ヤノさんは、病

マリ 氣や怪我で苦しんでいる人たちを、触つただけで助けることができる。千

トオルさん、この人の言ってること、本当？

ノダ
トモエダ

トモエダ。

(紙をノダに差し出す)

(受け取って) うちの新聞のコピーです。日付は1983年5月30日。

(とマリに差し出す)

(受け取って) 「奇跡の手を持った少年」

(覗き込んで) これがトオルくんなの？

今から13年前、当時12歳だった少年が、公園で同級生と遊んでいた時のこと。同級生の連れてきた犬が、道路に飛び出して、車にはねられた。少年は倒れた犬に駆け寄り、血だらけになった体を撫でた。すると、犬はすぐに目を開け、自分の足で立ち上がった。その話は、子供たちの間で、あつという間に噂になった。犬を治した少年の前に、次々と動物が運ばれてきた。それを、少年は次々と治した。ある日、少年の前に、子猫を抱いた少女がやってきた。少女の左手には、大きな火傷の跡があった。少年は子猫と一緒に、少女の左手にも触った。すると、少女の左手から、火傷の跡が消えた。

もういい。やめてくれ。

結局、あなたは30人の子供の病気や怪我を治した。その頃には、あなたの噂は大人たちの耳にも達していた。あなたの家には、医者に見放された重病患者が殺到した。その記事を書いた記者が行ったのも、その頃です。が、あなたはもう家にはいなかった。お姉さんと一緒に、アメリカへ行ったそうですね。

そんなことを調べて、どうしようっていうんですか。

別に何も。僕がここへ来たのは、あなたを記事にするためじゃない。あな

マリ
カズエ
ノダ

トオル
ノダ

トオル
ノダ

トオル
ノダ

たにお願いがあつて来たんです。
あなたの病気を治せって言うんですか？
僕じゃなくて、僕の友人を。彼は今、駅前のお茶店で、僕を迎えに来るのを待っている。あなたが治すって言ってくれるかどうか、首を長くして待っているんです。

トオル

その人を治したら、黙って帰ってくれますか。他の人には言わないって、約束してくれませんか。

ノダ

もちろんです。(とマリの手から紙を取って) あなたとここで会ったことはすべて忘れます。(と紙を引き裂く)

トオル
ノダ

わかりました。その人を、すぐにここへ連れてきてください。
ありがとうございます。トモエダ。

ノダとトモエダが去る。

マリ

トオルさん。
ごめんね、今まで黙ってた。

マリ
トオル

でも、どうして話してくれなかったの？ 私が騒ぎ出すとも思ったの？
死んだ親父と約束したんだ。「二度と力を使わない」って。今まで何度も約束を破ってきたけど、「今度こそは」って思ってたんだ。

マリ
トオル

どうして使っちゃいけないの？ たくさんの人が押しかけてくるから？
そうじゃない。力を使えば使うほど、僕の右手は死んでいくんだ。

マリ
トオル

どういうこと？
最初は指先だけだった。左手で触っても、何も感じなくなつたんだ。でも、

ワタルとエイコがやってくる。

エイコ
ワタル

何回かけても、話し中なんだから。一体誰と長電話してたの？

決まってるだろう、彼女だよ。「今夜会いたい」って言うから、「昨日も一昨日も会ったんだ。今夜は我慢しなさい」って叱ってたんだ。そうしたら、「私のこと、嫌いになったの？」って拗ねやがって。参ったよ。

エイコ

で、結局、今夜は会わないことにしたのね？

ワタル

いや、彼女が「5分でもいい」って言うから、1時間だけ。

エイコ

悪いけど、「やっぱり行けなくなった」って電話して。

ワタル

どうして。

エイコ

私と一緒に来てほしいのよ。トオルのマンションへ。

ワタル

トオルに何かあったの？

エイコ

ついさっき、マリさんから電話がかかってきたの。トオルの部屋に、ノダ

ワタル

ノダ？

エイコ

毎年新聞の記者よ。前のマンションにも来たでしょう？

ワタル

そいつが何しに来たんだ。

エイコ

友達の病気を治してくれて。

エイコ

ワタル
エイコ

それで、トオルは治したのか？

それはまだ。今、友達を迎えに行ってるところだって。でも、トオルは治すって約束しちゃったのよ。

ワタル

あのバカ。何回同じことをすれば、気が済むんだ。よし、すぐに行こう。

エイコ
ワタル

その前に、彼女に電話しないと。
そんなの、向こうに着いてからでいい。さあ、早く。

エイコとワタルが去る。
反対側から、ノダ・イナバ・トモエダがやってくる。

ノダ
イナバ

イナバ。おまえ、どこへ行ってたんだ。
いや、おまえがなかなか戻ってこないから、気分転換でもしてこようかと思ってる。

トモエダ
イナバ

パチンコですか？
バカ、ランニングだ。この近所を一周してくるつもりだったんだが、途中で迷子になっちゃった。

ノダ

相変わらず、のんきなヤツだな。いいか、イナバ。ヤノはオーケイしてくれたぞ。しかも、今すぐ治すって言うてくれた。俺が案内するから、急いでヤツのマンションへ行こう。

イナバ

いや、俺はいい。

ノダ

いいって、何だよ。
俺は帰る。ヤノって人には、おまえから謝っておいてくれ。

イナバ
ノダ

おい、今さら何を言ってるんだよ。

イナバ

久しぶりに走ったら、息が切れた。知らない間に、体が鈍ってたんだな。ボクシングを始めて10年になるが、こんなことは初めてだ。そろそろ潮時かなって思ったんだよ。

ノダ

潮時って何だよ。このまま引退するって言うのか？

イナバ

俺は今まで、あらゆる手を尽くしてきた。それで治らないんだから、諦めるしかないだろう。

トモエダ

でも、ヤノさんにはまだ会ってないじゃないですか。バカ、会っても同じだ。医者に治せないものが、素人に治せるもんか。

イナバ

ヤノの力が信じられないのか？

ノダ

信じられるわけないだろう。触っただけで治せるなんて。だ。その気持ちを信じてくれ。俺は何とかして、おまえの怪我を治したいんだ。

イナバ

それで治らなかつたら、笑いや者になるのは俺なんだぞ。笑いたいやツには、笑わせてやればいいじゃないか。おまえはプロのボクサーだろう。一体何を怖がってるんだ。

ノダ

……わかった。今度だけはおまえを信じよう。

イナバ

ノダ・イナバ・トモエダが去る。
反対側から、トオル・マリ・カズエがやってくる。

マリ

じゃ、私、トオルさんの部屋に行ってくるね。

トオル

僕も行くよ。
トオルさんはここにいて。お兄さんとお姉さんが来るまで。

トオル
マリ

カズエ

マリが去る。

トオル
カズエ
トオル

カズエ

トオル
カズエ
トオル

カズエ

でも、その前に、ノダさんたちが戻ってきいたら？
私が「しばらくお待ちください」って言うっておく。だから、絶対にここを動かないで。ママ、トオルさんがちよつとでも動いたら、力づくで止めてね。
オーケイ。

すいません。急にこんなことになっちゃって。驚いたでしょう？
トオルくんの力のこと？

こんな騒ぎになる前に、ちゃんと話をしておくべきでした。いきなり力なんて言われても、すぐには信じられないでしょうけど。
あら、私は信じるわ。他の人ならともかく、トオルくんならありえない話じゃない。私、前から変わった人だなんて思ってたのよ。英会話教室だって、生徒が一人もいないのに、ちつとも焦ってなかつたし。力を持つてることがバレないように、人目を避けて暮らしてたんでしょう？

そうです。180の時から、六回も引つ越しをしてきました。
そのたびに、大騒ぎになってたの？

ええ。でも、それは仕方なかつたんです。次の家に引つ越して、半年も経つと、だんだん我慢できなくなってくる。自分が何のために生きているのか、わからなくなるんです。力を使うたびに、僕はホツとしていたのかもしれません。
ここへ引つ越してきて、半年よね？ そろそろ使いたくなってきたの？

トオル

カズエ

トオル

カズエ

トオル

カズエ

トオル

カズエ

トオル

カズエ

トオル

カズエ

トオル

カズエ

トオル

今までのところは、平気でした。たぶん、マリちゃんやノリオくんと出会ったからだと思います。

じゃ、ノリオのことは全然気づいてなかったのね？

何がですか？

あの子、生まれた時から心臓が悪いのよ。心房中核欠損症ってヤツ。手術をすれば治らないこともないんだけど、失敗する確率も高いんですって。

そんな話、初めて聞きました。

普通に生活するだけなら、何の問題もないのよ。でも、激しい運動は絶対にしちゃいけないの。

それで、マリちゃんはいつも「走るな」って。

何度注意されても走るから、すぐに熱が出るのよ。

それじゃ、今日、熱が出たのも、チラシ配りをやったから？

マリには「ゆっくり配れ」って言われたみたいだけど、つい張り切っちゃったんだらうな。

それがわかっていけば、手伝わせたりしなかったのに。

あの子、小さい頃から映画が好きでね。今は監督になりたいって言うてるけど、本当は俳優になりたいのよ。中でも、一番の夢はアクション映画。

刑事になって犯人を追いかけたり、立ち回りを演じたりしたいのよ。本当はね。

わかりました。ノリオくんを連れてきてください。

いいの？

もちろんですよ。ノリオくんは、僕の教え子です。彼のためになることなら、何だっただけです。

カズエ

ありがとう。すぐに連れてくるわ。

カズエが去る。
反対側から、マリ・ノダ・イナバ・トモエダがやってくる。

マリ

ちよつと待って。人の家に勝手に入らないでください。

ノダ

あなたの方こそ、勝手にヤノさんを隠したじゃないですか。

マリ

私は、少しだけ待ってほしいって言ってるんです。確かに、さっきは治す

マリ

って言いました。でも、もう一度冷静になって考えた方がいいと思つて。

ノダ

それは、ヤノさんの意志ですか？

マリ

もちろんです。だから、隣の部屋で待っててください。

トオル

いいんだ、マリちゃん。

マリ

いいって、何よ。

トオル

僕はもう治すって決めたんだ。兄貴が来て、止めたとしても、僕の気持ち

マリ

は変わらない。

トオル

でも、トオルさん。

ノダ

ノダさんのお友達っていうのは、そちらの方ですか？

イナバ

そうです。イナバ、こちらがヤノさんだ。

トオル

初めまして、イナバです。

イナバ

あなたの話を聞かせてください。一体どこが悪いんですか？

トオル

(右の拳を出して) ここです。

トモエダ

拳ですか？

トモエダ

イナバさんはボクサーなんです。

ノダ
トオル
ノダ
トオル
イナバ
トオル
ノダ
トオル
イナバ
トオル
ノダ
マリ
ノダ
マリ
トオル
イナバ
トオル
ノダ
マリ
ノダ

3年前にデビューして、今は日本バンタム級の1位なんです。このまま行けば、世界ランカーに挑戦できるってところまで来てたんですが。

試合で怪我をしたんですか？

いや、練習のしすぎで、拳の骨が折れたんです。それなのに、痛み止めの注射を打って、試合に出た。

医者には見せましたか？

破砕骨折って診断されました。

痛みを感じないからって、思い切りパンチを打ったんです。打ったたびに骨が砕けていったんだ。

でも、今は元通りに動くようですね。

いや、握るのがやつとです。医者には、「試合は二度と無理だ」って言われました。何軒回っても、「無理だ」って。

普通だったら、引退ですよ。しかし、こいつは十年に一人の逸材なんです。もう一度、ボクシングがやりたいんですか？

俺はまだ25です。強くなるのは、これからなんです。

僕も25です。あなたの気持ちはよくわかります。じゃ、右手を出して。ちよつと待って。

あなたは口出ししないで。

(トオルに)その人を治したら、また同じことになるのよ。たくさんの人たちが押しかけてきて、ここにはいられなくなるのよ。

僕は誰にも話さない。(トオルに)だから、安心してください。

そんなの、信じられると思う？ あなたは記者でしよう？

僕はイナバの友人だ。イナバを助けるためなら、何だってする。

マリ

だから、トオルさんはどうなってもいいって言うの？ その人の手を治したら、トオルさんの手は。

トオル

もういい。(イナバに) さあ、右手を出して。

イナバ

ちよつと待ってってくれ。(マリに) この人の手が、一体どうなるっていうんです。

そこへ、カズエとノリオがやってくる。

ノリオはパジャマを着ている。

マリ

ノリオ。どうしたの、そんな恰好で。

ノリオ

ママが「トオルさんと話をしろ」って言うから。

マリ

話って何よ。

トオル

ノリオくんの病気の話だよ。どうして教えてくれなかったんだい？ ノリオくんの心臓が悪いつてこと。

マリ

(カズエに) まさか、トオルさんに治してくれって言ったんじゃないでしょうね？

トオル

違うんだ、マリちゃん。僕が治すって言ったんだ。

マリ

(カズエに) どうして？ どうしてノリオのことを話したのよ。

カズエ

助けてほしいからよ。ノリオを他の子と同じように、走れるようにしてほしいからよ。

マリ

じゃ、トオルさんは？ トオルさんはどうなってもいいっていうの？

イナバ

説明してくれ。力を使ったら、この人の手はどうなるんだ。

ノダ

どうなるうと、俺たちには関係ないじゃないか。

イナバ

トモエダ
マリ

イナバ
トオル

そこへ、ワタルとエイコがやってくる。

エイコ
ワタル
トオル
ワタル
トオル
エイコ
トオル
エイコ
トオル
ワタル

おまえは黙ってる。(トオルに) あんた、右手をどうかしたのか？ さっきから、ちっとも動かさないじゃないか。

(トオルに) まさか、あなたも怪我をしてるんですか？

違うわ。他の人の怪我を治してるうちに、トオルさんの右手は動かなくなつたのよ。(イナバに) あなたの怪我を治したら、もつと動かなくなるのよ。

(トオルに) 本当か？

ほんの1ミリか2ミリです。だから、あなたが気にすることは無い。

トオル。

こんな所で何をしてるんだ。さあ、俺と一緒に来い。

すぐに行くよ。この人の怪我を治してから。それに、ノリオくんの病気を治してから。

バカなことを言うな。さあ、さっさと来るんだ。

いやだ。

トオル、私たちの言うことを聞いて。

姉さんたちこそ、たまには俺の言うことを聞いてくれ。俺はこの人たちを治したいんだ。

そんなことをしたら、あなたはどうなるのよ。

俺はどうなってもいいんだ。

何が「どうなってもいい」だ。偉そうな口をきくな。

トオル

ワタル

トオル
エイコ

トオル
エイコ
トオル

ワタル
トオル

エイコ
トオル

ワタル

偉そうな口なんてきてない。俺は自分が偉いなんて思っていない。俺はただ、この人たちを治してあげたいだけなんだ。俺の手と引き換えに、この人たちが助けられるなら、俺はそれで十分なんだ。確かに、おまえは十分だろう。しかし、おまえの体が動かなくなったら、俺たちはどうすればいい。おまえがやっていることは、自殺と同じことなんだぞ。

自殺？

そうよ、トオル。あなたには、お父さんが死ぬのを止められなかった。あの時を悔しさを忘れてないはずよ。それを今度は、私たちに味わえて言うの？

俺は死のうとしてるんじゃない。生きようとしてるんだ。

生きようと？

俺は何のために生きてる？ 英会話を教えるためか？ 兄さんや姉さんに厄介をかけるためか？ そうじゃない。俺は誰かの病気を治すために生きてるんだ。俺が生きてるって思えるのは、誰かの病気を治してる時だけなんだ。

そんなの、ただの自己満足だ。

そうさ、ただの自己満足さ。でも、俺は何かしたいんだ。何もしないで生きるなんて、絶対にイヤなんだ。

トオル。

「ありがとう」って言ってもらいたくないか。そう言ってもらえれば、どんなに苦しくても、生きていけるじゃないか。

トオル さあ、イナバさん。ノリオくん。
マリ トオルさん、待って。
カズエ お願ひ、マリ。ノリオを助けてあげて。
マリ でも、ママ。
トオル 僕は僕のために力を使うんだ。僕が生きるために。

そこへ、ヒサシがやってくる。

ヒサシ そのかわり、おまえはすべてを失う。

トオル それは仕方ないことなんだ。

ヒサシ 本当に仕方ないことか。おまえは本当にそれでいいのか。

トオル ああ。

ヒサシ 「If never has to be one way and no other way」……」の

トオル 道しなくて他の道はない、なんていうことは決していないんだ。

トオル わかっているよ、父さん。でも、今の俺には、この道しかないんだ。

トオルがノリオの胸に触れる。

ノリオがうづくまる。

カズエ ノリオ。(とノリオに駆け寄る)

トオル 大丈夫。すぐに、元気になります。

ノダ さあ、イナバ。(とイナバの背中を押す)

イナバ (トオルに) あんた、手は大丈夫か。

トオル
いなば
ちよつと痺れてますけど、大丈夫です。さあ、あなたも右手を出して。
いや、俺はやめておこう。

ノダ
どうして。

いなば
俺はまださだ。今からだって、他の道を探すことはできる。

ノダ
しかし。

トモエダ
いなばさんが決めたことですよ。喜んで、応援してあげましょうよ。

いなば
（トオルに）あんたのおかげで決心がついた。ありがとう。

ノダ
いなば。

ノダ・いなば・トモエダが去る。
トオルがベンチに座り込む。

マリ
トオルさん。（とトオルに駆け寄る）

ワタル
（トオルの右手をつかんで）ひどい熱だ。向こうの部屋で寝かそう。

エイコ
しつかりして、トオル。

トオル
ごめんよ、また約束を破って。

エイコ
いつものことよ。でも、これが最後だからね。

トオル
ああ。

トオル・ワタル・エイコが去る。

カズエ
マリ、ごめんね。
……

カズエ
マリ

ごめんね。ごめんね。
仕方ないわよ。トオルさんの選んだことなんだから。

マリが一人で立っている。

マリ

「ありがとう」は感謝の言葉。昔、「有り難き幸せ」といっていたのが短くなつたものらしい。普通ではありえないほどの幸せ。それって、一体どんな幸せだろう。治らないはずの病気が治ることか。死んだはずの人が生き返ることか。私はそうは思わない。たとえば、好きな人がいつもそばにいてくれること。そんな些細なことが、人によつては「有り難き幸せ」になる。現に、今の私がそうだ。次の朝、トオルさんの部屋へ行ってみると、ドアには鍵がかかっていた。何回チャイムを鳴らしても、ドアは開かなかつた。そして、私は気づいたのだ。トオルさんに「ありがとう」と言えなかつたことに。

そこへ、トオルがやってくる。

左手にトランクを持ち、右手をポケットに突っ込んでいる。

トオルは周囲を見回し、近くににあったベンチに座る。

トオルは左手でトランクを開き、中から地図を取り出す。

そこへ、ヒサシがやってくる。

ヒサシ

また引越しか？

トオル

ああ。兄さんが、また次のマンションを探してくれて。でも、俺はし

ヒサシ

ばらく、東京を離れようと思うんだ。

トオル

どこへ行くんだ。

ヒサシ

決めてない。どこでもいいんだ。北海道でも、沖縄でも。

トオル

おまえがここを出ることを、あの子は知ってるのか。

ヒサシ

彼女の話はやめよう。

トオル

そうはいかない。俺は前にも言ったはずだぞ。おまえが突然、姿を消した

ヒサシ

ら、あの子はきつと傷つくだろうって。

トオル

彼女には、いつか手紙を出すよ。

ヒサシ

それがおまえの答えか？ 手紙なんかで、あの子の傷が治ると思ってるの

トオル

か？

ヒサシ

でも、他にどうすればいいんだ。

トオル

一つだけ方法があるだろう。

ヒサシ

どんな方法さ。

トオル

よし、第一ヒントだ。おまえには、あの子の傷を治すことができない。だ

トオル

ったら、あの子を傷つけなければいいんだ。つまり、引越しは取り止め

トオル

にすればいいのさ。しまった。答えを全部言ってしまった。出ていくしかないんだ。

トオル

それは無理だよ。俺はもうここにはいられない。出ていくしかないんだ。

トオル

そこへ、マリがやってくる。トオルの横に座る。

トオル

トオルが地図をしまい、トランクをつかんで立ち上がる。

トオル

マリもすぐに立ち上がり、トランクをつかむ。

二人がトランクを引つ張り合う。
と、トランクの蓋が開いて、中身がドツと地面にこぼれ落ちる。
トオルが慌てて中身を拾い始める。
マリも目の前に落ちていた靴下を拾う。

マリ (靴下を差し出して) はい。

トオル (受け取って) この靴下、洗ってないんだ。

マリ 後で手を洗っておきます。だから、ご心配なく。

トオル その科白、前にも聞いたことがある。

マリ 半年前よ。ここで初めて会った時。

トオル あの時、ここで会わなかったら、今でも知らない同士だったんだろうな。

マリ そうね。でも、私たちは会った。そして、知り合いになった。なのに、挨拶

トオル 拶もしないで出ていくつもり？

マリ 後で手紙を書こうと思ってたんだ。

トオル それで、私が許すと思う？

マリ 思わない。でも、僕にはそれぐらいのことしかできないんだ。

トオル 他にも方法があるでしょう？

マリ わかっているよ。ここに残れって言うんだらう？

トオル 違うわ。私も、トオルさんと一緒に行くのよ。そうすれば、手紙なんか書

マリ かななくて済むじゃない。

トオル そんなこと、できるわけないだろう？

マリ どうして？

トオル だって、僕らは夫婦じゃないし、恋人同士でもないし。

マリ そうだったの？
 トオル だって、「好きだよ」とか「私もよ」とか、一言も言っていないじゃないか。
 ヒサシ じゃ、言えよ。
 トオル そんなこと、いきなり言えるわけないだろう。
 マリ だったら、「ありがとう」でいいわ。私は「一緒に行く」って言ったの。
 トオル だから、トオルさんは「ありがとう」って言えばいいのよ。
 マリ でも、僕にはマリちゃんを幸せにする自信がない。
 トオル バカね。トオルさんが「ありがとう」って言って言ってくれれば、それで私は幸
 せになれるのよ。
 トオル そうか。それだけでいいのか。
 マリ 意外と簡単でしよう？
 トオル ああ。なんだか魔法みたいだ。
 マリ だから、一人で行くなんて言わないで。もし行こうとしても、私は絶対に
 ついていくから。トオルさんが「ありがとう」って言うまで。
 トオル ありがとう。
 マリ え？ 今、なんて言った？
 トオル ありがとう。
 マリ 聞こえないな。もう一度、言ってくれないと。
 トオル ありがとう。

トオルが右手をマリの差し出す。
 マリが右手をトオルに差し出す。
 二人が握手をする。

そこへ、8人がやってくる。
8人が右手を前に差し出す。
そして、見えない相手と握手をする。

∧
幕
∨